

21. 腎癌と肺癌の重複癌症例で、転移巣の組織診断に Tc-DMSA が有用であった症例

多田 明 平 栄 立野 育郎
(国立金沢病院・放)
村山 和夫 勝見 哲郎 (同・泌尿)
高橋 志郎 (能登総合病院・放)

症例は70歳男性、主訴は咳、血痰、肺の異常陰影。昭和61年には左腎細胞癌の手術を受けている。入院時の胸部写真では左中肺野に 6 cm 大の異常陰影を認め、抗生剤の投与で結節性の腫瘤が残ったために気管支ファイバーを施行し、肺原発の腺癌が発見された。8月から放射線治療が行われたが、10月になって右鎖骨の病的骨折を起こした。11月には左肩甲骨、12月には左右大腿骨と脳内に転移を認めた。各転移巣が腎癌からか、肺癌からのものかを鑑別するために、腎スキャン用剤である Tc-DMSA の全身スキャンを行ったところ、明瞭な異常集積を認めた。Tc-DMSA は腎の皮質に特異的に集積するため、集積した転移巣が腎癌からのものであると診断可能であり、剖検でも確認された。

22. 強皮症患者肺線維症の Conventional 法による ^{67}Ga シンチグラフィーの定量的評価

秦 良行 中村 和義 大井 牧
野村 新之 豊田 俊 竹田 寛
中川 毅 (三重大・放)

強皮症患者15例について、肺線維症の活動を評価する

ため、 ^{67}Ga を用いて肺野 Ga 集積の定量的測定を試みた。Macey の方法により planar 法で求めた胸部前後像を相乗平均し、トランスミッションデータで補正して肺野 Ga の集積率を求め、また同時に SPECT を併用し比較検討した。planar 法と SPECT 法とでは肺野集積測定に大きな相違があり、この原因を SPECT 像で検討したところ、胸壁、特に肋骨への集積が planar 法での肺集積に大きな影響を与えていた。軽度のガリウム肺集積を評価するには、planar 法では限界があると考えられた。また、肺野ガリウムの集積と CT 像とは関連せず、今後の検討が必要と思われる。

23. 当院における甲状腺腺癌の ^{131}I による治療成績

加藤 憲幸 豊田 俊 瀬田 秀俊
村嶋 秀市 中川 毅 (三重大・放)

分化型甲状腺腺癌全摘後、局所制御の得られなかった症例34例に対して ^{131}I による治療を行った。局所制御に関しては治療を2回以上行った症例16例中11例68%で uptake が消失しており、非常に有効と考えられた。

治療2回で治癒した群と治癒しなかった群の間に初回検査時の uptake, PBI, TSH の有意の差はなかった。

治療を2回行った症例の uptake, TSH はそれぞれ有意に低下、上昇し、Tg は低下傾向を示し、治療の指標になるものと思われた。